【目的】生殖補助療法（ART）の普及とともに，子宮内移植反復不成功，胚発育不良例などの難治性不妊症例に遭遇する機会が増えており，一般に卵管内移植は子宮内移植よりも良好な成績を得ることが知られている。我々はART反復不成功例にICSI後半に腹腔鏡下に卵管内移植するICSI-GIFTを，また腹腔鏡下手技を比べる簡便で侵襲の少ない子宮鏡下卵管内移植（ICSI-GIFT，ZIFT及び2段階移植）を施行し，その有用性について検討した。【方法】ART反復不成功例においてインフォームドコンセントの得られた32症例36周期を対象とし，腹腔鏡下（以下L群）18例，子宮鏡下（以下H群）ICSI-GIFT:10例，ZIFT:4例，2段階移植（同じ日にICSI-GIFT施行しさらにDay5に胚盤腔移植）3例であった。L群全身麻酔下に経腹的に探察し，MII卵にICSI操作を施行，左右2個または1個，最大4個以内で卵管内移植を腹腔鏡下に施行した。H群：子宮鏡はOESシステム，ビューボックスを用いCO2還流のもと，フレアライトプロテクターコード（FRC-H630-1, 素皮カラバリ）を使用し，子宮内視鏡検査にて通過性の確認されている卵管に1例を2周期移植した。【成果】17周期の平均年齢，既往ART回数はL群34歳±4.8歳，7週±4.7週，H群38歳±4.3歳，113週±78回で有意差を認めなかった。妊娠率（胎嚢陽性）はL群：27.8％（5/18），H群：11.8％（2/17）で有意差を認めなかった。【結論】ART反復不成功例に対して卵管内移植は有用な可能性が示され，また子宮鏡下卵管内移植は腹腔鏡下処置に比べ簡便かつ低侵襲であり，今回，妊娠例を得られたことから，今後症例を増やしつつ検討していく予定である。

P1-371当院における単一胚移植法（Single Embryo Transfer：SET）の臨床効果に関する検討
加藤レディスクリニック，金沢大，日本大聴河合病院
宮内，鶴田，瀬川智也，藤田，河内谷敏，渡邊真由，竹野祐志，貝嶋弘恒，寺元章吉，加藤，加藤，加藤高一，長田高夫

【目的】IVFによる多胎妊娠の増加は新生児医療への負担等問題となっている。我々は多胎妊娠防止目的のためにSETを行いその臨床効果を検討した。【方法】2003年11月～2006年7月に当院で初回IVFを施行した39才以下の不妊症患者886症例を対象とし，すべてクラミオフェン-hMGで排卵誘導を行い2個の分割胚（うち少なくとも1個はGrade良好胚）が得られた症例のみとした。これらをSET群455例とDET（Double Embryo Transfer）群431例分けて比較検討した。SET群の余剰胚は分割胚または胚盤腔で凍結保存（vitrification）を行い，次周期以降に解凍胚移植を行なった。【結果】両群間に年齢，不妊期間，不妊原因，胚管に対して胚盤腔移植の差は認めなかった。初回新鮮胚移植の妊娠率は，SET群37.8％，DET群41.5％と差は認めなかったが，多胎妊娠率は0.0％，16.8％と有意差を認めた（p<0.001）。また流産率，子宮外妊娠率に差は認めなかった。SET群の非胚管症例において余剰胚を分割胚凍結した症例（CC群）が92例，胚盤腔まで培養を続けた症例（BC群）が191例であったが，次周期の解凍胚移植周期の妊娠率はCC群の方がBC群よりやや高かった（32.6％vs 26.9％，有意差なし）。またこの結果により，SET群の無数胚移植率は52.5％となり，DET群41.5％と比べて有意差を認めた（p<0.001）。【結論】今回の結果より，得られた分割胚が多くてもある移胚数を1個に限定して余剰胚を凍結保存した方がより高い累積妊娠率が期待でき，かつ多胎妊娠の発生をゼロに近づけることが出来る優れた方法であることが示された。

P1-372体外受精胚移植における単一胚移植の年齢別臨床成績についての検討
加藤レディスクリニック，金沢大，内谷敏，瀬川智也，藤田，河内谷敏，宮内，勝股克成，末吉智博，野野，竹野祐志，貝嶋弘恒，寺元章吉，加藤，加藤，加藤高一

【目的】体外受精胚移植での単一胚移植周期における年齢別妊娠率，ならびに多胎率，子宮外妊娠率を検討した。【方法】平成17年1月より12月までに当院で単一胚移植を実施した7679治療群につき，年齢別に臨床的妊娠率，継続妊娠率，多胎妊娠率，子宮外妊娠率を算出し検討した。【結果】30歳群の年齢平均は37歳6歳，新鮮胚移植は3409周期（分割胚移植3318周期，胚盤腔移植91周期）。凍結胚移植は4267周期（分割胚移植557周期，胚盤腔移植3712周期）であった。妊娠反応陽性率は38.7％，胎嚢確認率31.8％，心拍確認率27.9％，継続妊娠率24.3％であった。多胎妊娠はすべて多胎例10例に認めたと4胎率は継続妊娠あたり0.5％であった。子宮外妊娠は1例のみ全て移植周期あたり0.1％，妊娠反応陽性群あたり0.3％であった。年齢別に臨床的妊娠率，胎嚢確認率は余剰胚移植率を比較すると，20代が53.8％，50代が41.7％，30〜44代が42.8％，39.1％，36.4％，35〜39歳35.3％，31.6％，27.3％，40歳以上では17.8％，13.9％，10.1％であった。【結論】単一胚移植の妊娠率は解決困難症例周期と同様，年齢の上昇に伴い減少していく結果となったが，従来の報告と比べ妊娠率の大きな低下は認めなかった。多胎妊娠および子宮外妊娠率のいずれも1％未満であり，体外受精周期の従来の報告と大体同に低値していた。体外受精胚移植では多胎の増加など周産期医療に大きな負担をかけている現状があるが，単一胚移植により多胎妊娠を自然妊娠と同程度まで減少させる可能性があることが示唆された。